

幼稚園・保育所における「キレる」幼児の現状

—— 全道の幼稚園・保育所を対象とした調査から ——

Emotional Dysregulation of Children at Kindergartens and Nursery Schools

星 信子 請 川 滋 大*
Nobuko HOSHI Shigehiro UKEGAWA

はじめに

「キレる」という言葉が使用されるようになったのは、1980年代末～90年代にかけてであるといわれているが、今日では日常用語としてすっかり定着し、頻繁に使用されている。宮下(2002)は最近の研究を概観し、「キレ」という現象を「心理的・器質的要因等に基づいて生じる、比較的強い否定的な感情の喚起・表出を伴う攻撃行動」と定義しているが、一般にはその使用の仕方や意味する内容については必ずしも一致した理解がなされていない。また、キレる子どもの問題として主に取り上げられてきているのは、思春期の子ども達である。特に近年、青少年の凶悪犯罪が注目を集めていることと、キレる子ども達の増加を関連づけて論じられることも多い。

しかし、キレる子ども達は思春期に突然現れるのではなく、児童期・幼児期からすでに存在していると考えられる。幼児期におけるキレる子どもの実態についての研究は、全国の保育所を対象とした安部ら(2002)の調査以外ほとんどなく、特に幼稚園での実態はあまり明らかになっていない。そこで、本研究では、北海道内の全ての認可幼稚園・保育所を対象としてキレる幼児について調査した結果を基に、キレる幼児の現状やその原因を保育現場でどう捉えているかについて、幼稚園と保育所の比較を含めて報告する。

調査方法

北海道内の全ての認可幼稚園・保育所(乳児のみの園を除く)を対象とした質問紙調査を実施した。質問紙は、郵送により配布・回収した。配布数は幼稚園874・保育所652、有効回答数は幼稚園322・保育所268、回収率は幼稚園36.8%・保育所41.1%であった。調査用紙は各園に一部ずつ郵送し、回答者は園で自由に選定させた。調査対象とした保育所には乳児クラスを併設しているものも多くあるが、本調査では、3歳以上のクラスを対象として回答するよう依頼した。

本調査は、北海道における最近の子どもと養育者の現状に対する、高等学校から保育所まで

* 日本女子大学

の悉皆調査の一部として実施したものである。キレル子どもについての質問項目は、安部ら(2002)を参考に、一部改変して実施した。全体の調査には、キレル子どもについての項目の他に、最近の子どもや養育者の様子、小学校の学級機能不全などについての項目を含んでいる。

結 果

1. 幼稚園・保育所におけるキレル子どもの有無

幼稚園・保育所におけるキレル子どもの有無について、図1に示す。図1によると、幼稚園では34.2%、保育所では62.4%の園でキレル子どもがいると回答しており、保育所の方が有意に多い ($\chi^2 = 47.2, p < .001$)。保育所では、比率にして幼稚園の倍近い園でキレル子どもが存在すると回答しており、同じ年齢層の子ども達であってもかなりの差があることがわかる。

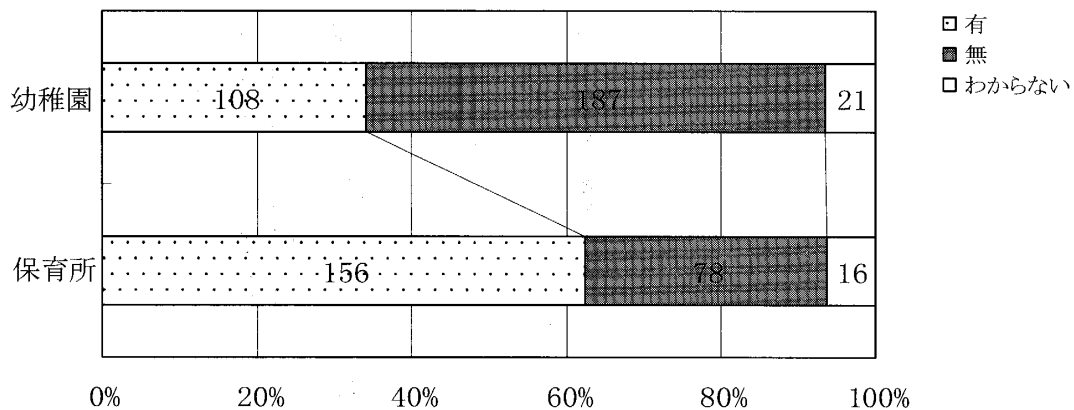


図1 キレル幼児の有無

また、全園児数に対するキレル幼児の出現率を算出してみると、幼稚園では平均3.8%、SD 5.6、保育所では平均5.9%、SD4.2であった(ただし、この数値は暫定的なものである。キレル幼児の人数については、各年齢毎に何名いるかを回答させたが、5名以上については正確な人数の記入を求めている。そのため、出現率は、同一年齢で5名以上のキレル幼児がいる場合は、暫定的に5名として算出した。同一年齢で5名以上との回答は4歳児と5歳児では全体の数%、3歳児では1%にも満たないため、正確な人数で算出しても数値に大きな変動はないと考えられるが、実際には多少値が大きくなる可能性がある)。

また、この出現率を、3%未満、3%~10%、10%以上の3群に分けた結果を図2に示す。図2によると、幼稚園ではキレル幼児の出現率が3%未満の園が全体の61.5%を占めているが、保育所では26.6%のみであり、幼稚園と保育所での出現率には有意な差がみられた ($\chi^2 = 17.8, p < .001$)。

次に、キレル幼児の性別について図3に示す。キレル幼児の性別について、男児が多いとする園は、幼稚園では76.2%、保育所では79.7%であり、幼稚園・保育所ともにほとんどの園で男児が多いとしていることがわかる。キレル幼児の性別については、幼稚園と保育所の回答に差はみられなかった。

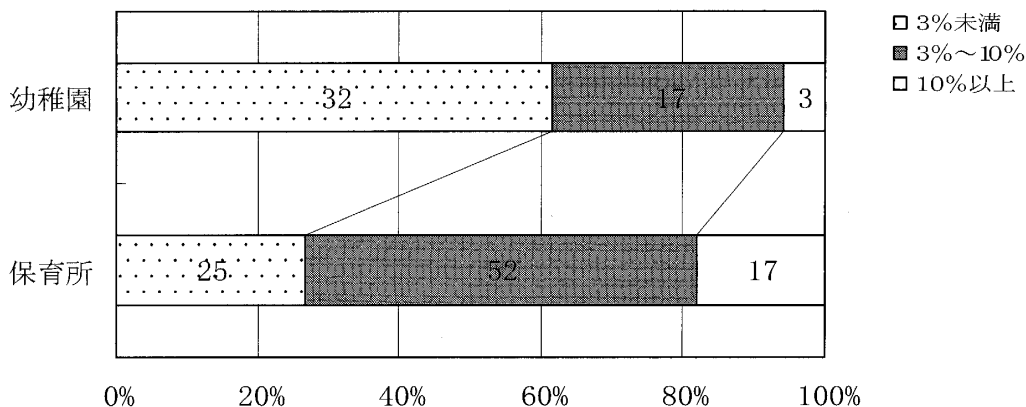


図2 キレル幼児の出現率

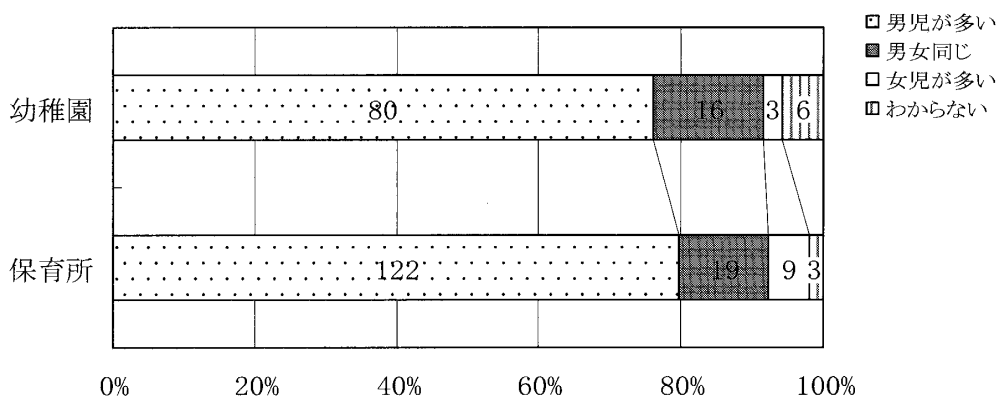


図3 キレル幼児の性別

また、キレル子どもの年齢別の人数について、5人以上を暫定的に5人として平均値を算出すると、5歳が1.6人 (SD, 1.2), 4歳が1.4人 (SD, 1.2), 3歳が1.0人 (SD, 1.1) と年齢が高いほど人数が多く、幼稚園と保育所はほぼ同様の傾向である。また、3歳児の人数と5歳児の人数について対応のあるt検定にかけてみると、有意に5歳児の人数が多かった ($t=5.4$, $p<.01$)。さらに、どの年齢でも年齢毎のキレル子どもの人数は1人が最も多いが、年齢毎にキレル幼児が複数いると回答した園は、5歳児では90園以上、4歳児でも80園以上みられた。

2. 幼稚園・保育所でのキレル子どもの状態

幼稚園・保育所におけるキレル子どもの状態（複数回答）を、図4に示す。図4によれば、保育現場では、感情の制御が困難な子どもをキレル子どもと捉えている場合が81.1%と最も多い。ついで身体的（59.1%）・言語的（48.7%）・物にあたる（46.4%）などの攻撃行動、奇声を発する（35.5%）などの行動が多くみられている。

これらの状態のうち幼稚園と保育所での出現比率に有意な差が認められたものは、言葉による攻撃と奇声を発するである。言葉による攻撃は保育所の出現比率が高く（幼稚園37.0%、保育所 56.7%, $\chi^2=9.9$, $p<.01$ ）、奇声を発するについては幼稚園の出現比率が高かった（幼

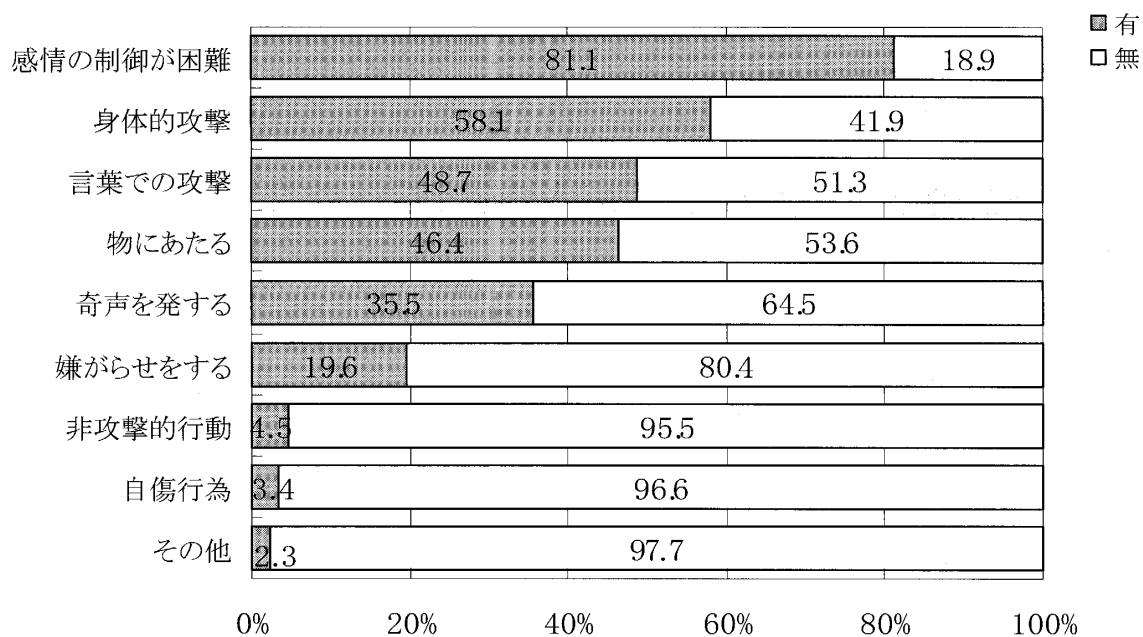


図4 キレル幼児の状態

幼稚園44.4%，保育所 29.3%， $\chi^2 = 6.4$, $p < .05$)。その他の状態については，幼稚園と保育所の差はみられなかった。

3. 幼児がキレル原因

幼稚園・保育所において子どもがキレル原因を図5に示す(複数回答)。図5によれば，保育現場で幼児がキレル原因は様々であるが，他者が自分に従わない(61.1%)，行動を制限された(50.2%)，自分が否定・拒否された(49.8%)など，自分の意図が妨害されたり，他者の否定的な反応に対するものが多い。また突然わけもなくキレル・身体が接触しただけでキレルといった行動は，出現比率は各々21.9%とそれほど高くはないが，幼稚園・保育所あわせて58園で報告されており，幼児期でもすでに，非常にささいな原因でキレル子どもが存在していることがわかる。

これらの原因のうち幼稚園と保育所で有意な差が認められたものは，玩具などをめぐるトラブル(幼稚園：49.1%，保育所：66.9%)，他者の注意を引きたい(幼稚園：24.1%，保育所：40.8%)，わけもなく(幼稚園：15.7%，保育所：26.1%)，でありいずれも保育所で多くみられた(トラブル： $\chi^2 = 8.4$, $p < .01$ ，注意： $\chi^2 = 7.9$, $p < .01$ ，わけもなく： $\chi^2 = 4.0$, $p < .05$)。

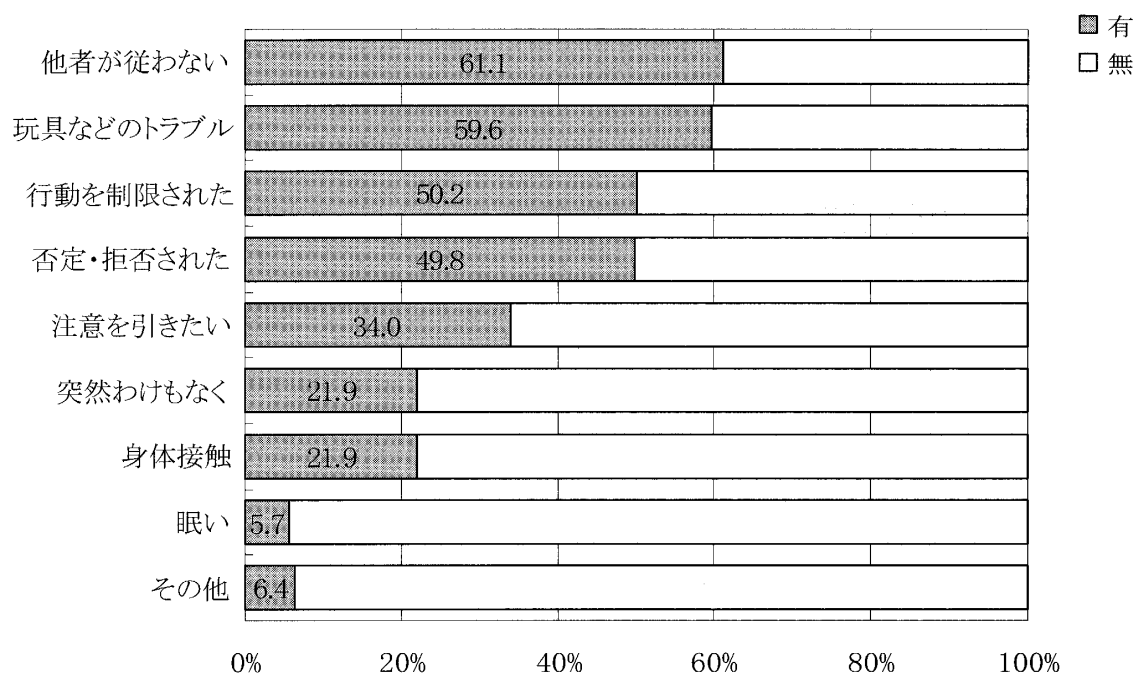


図5 キレル条件

4. キレル子どもの背景

次に、キレル子どもの背景として、家庭での不適切な養育の有無、家庭での虐待の有無、子ども自身の器質的問題の有無について図6から図8に示す。

図6によると、虐待とまではいかないが家庭での養育が不適切であると考えられるケースがあると回答した園は、幼稚園61.5%・保育所73.2%であり、幼稚園、保育所の差はなかった。また、図7によると、キレル子どものうち、虐待を受けていると思われるケースがあると回答した園は保育所で18.5%であり、有意に幼稚園(5.6%)よりも多かった($\chi^2 = 12.6, p < .01$)。虐待を受けていると思われるケースがあると回答した園に、その虐待の種別について尋ねたところ、最も多かったものは心理的虐待(61.8%)であり、次いで身体的虐待(44.1%)、ネグレクト(38.2%)となっており、性的虐待は2.9%とほとんどみられなかった。

さらに、図8によるとキレル子どもに器質的問題があると回答した園は、幼稚園38.8%・保育所25.3%であり、これはむしろ幼稚園で有意に多かった($\chi^2 = 7.0, p < .05$)。虐待と同様に、器質的問題があると回答した園にその器質的問題の種別を尋ねたところ、ADHD(注意欠陥多動性障害: 56.2%)が最も多く報告され、次いで精神発達遅滞(26.0%)、さらに言語発達遅滞(17.8%)、自閉症(15.1%)、LD(学習障害: 15.1%)となった。

5. キレル子どもへの対処

最後に、キレル子どもやその養育者に対し、適切に対処できていると思うかどうかについて、図9・10に示す。

図9及び10によると、キレル子どもへ適切に対処できていると思うと回答している園は、幼

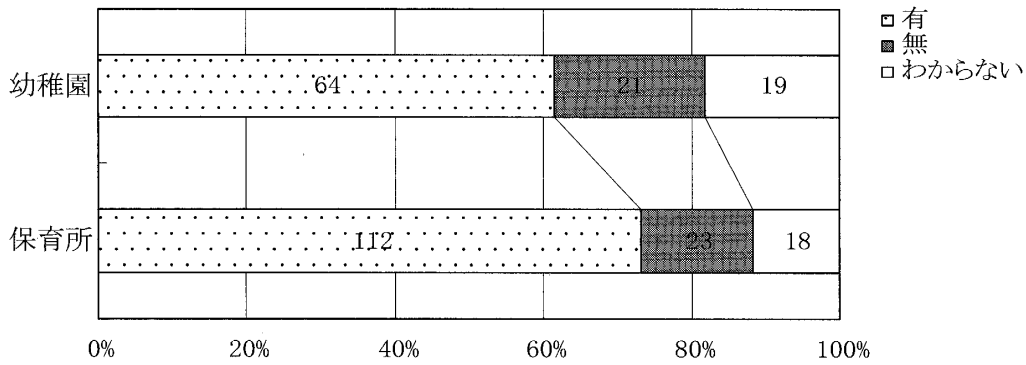


図6 キレル幼児に対する不適切な養育の有無

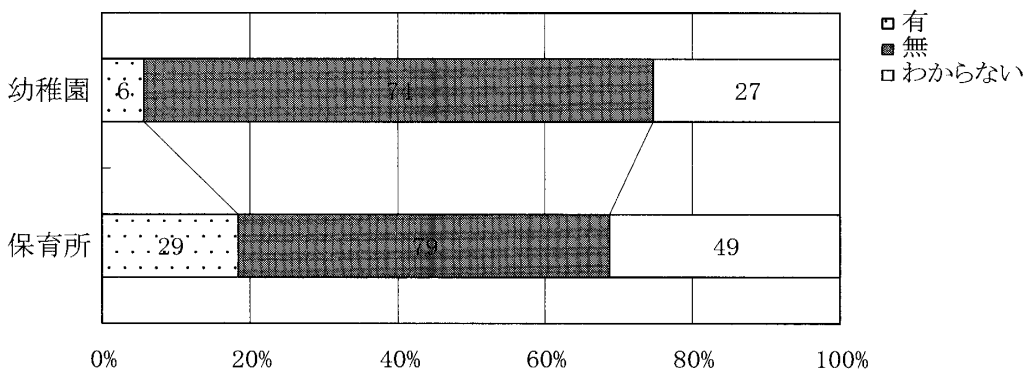


図7 キレル幼児に対する虐待の有無

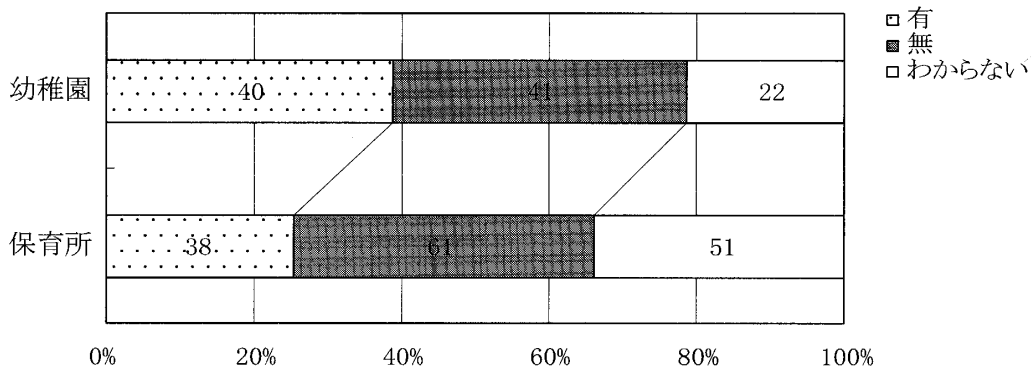


図8 キレル幼児の発達障害の有無

幼稚園44.9%・保育所49.0%，キレル子どもの養育者に適切に対処できていると思うと回答している園は幼稚園42.5%・保育所36.5%であり，いずれの回答についても幼稚園，保育所の差はみられなかった。しかし，幼稚園では子どもへの対処と養育者への対処に対する回答がほとんど変わらないのに対し，保育所では子どもに対しては適切に対処できていると思うという回答が約半数で最も多いが，養育者に対しては，適切に対処できていると思うと回答した園と思わないと回答した園がほぼ同数であり，子どもに対してよりも養育者への対処に困難を感じている園が多いようである。

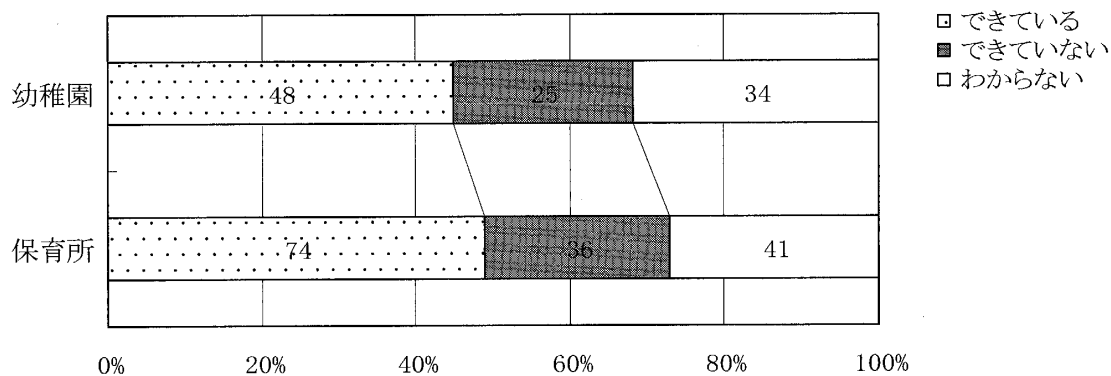


図9 キレル幼児への適切な対処

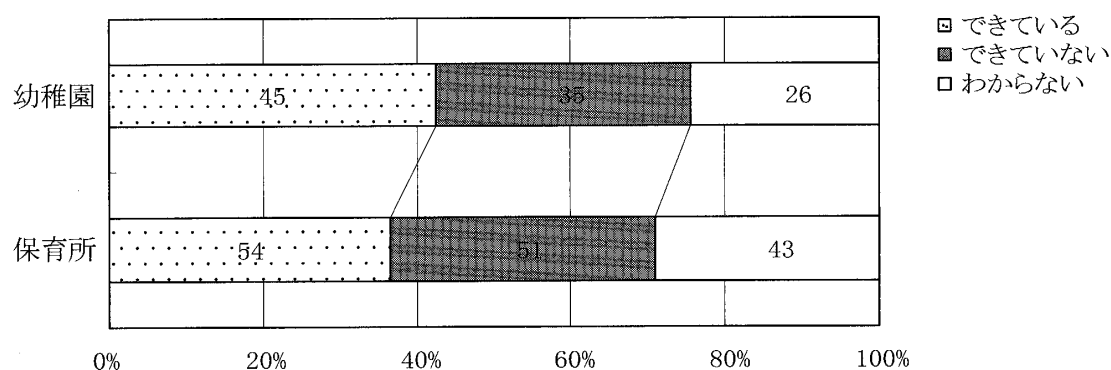


図10 キレル幼児を持つ養育者への適切な対処

考 察

以上の結果を大きくまとめると、以下の4点となる。

- ・ 保育現場ではかなりの園でキレル幼児がみられており、特に保育所で多く報告されている。性別は男児が多い。
- ・ キレル幼児の状態として、感情の制御の困難及び攻撃的行動が多くみられる。キレル原因としては、自分の意図の妨害、他者の否定的反応に対するものが多く、また些細なことでキレてしまう幼児もみられる。
- ・ 背景として、家庭での養育が適切でないケースが相当数みられる。
- ・ キレル幼児へは半数程度、その養育者へは4割程度の園がうまく対応できていると考えている。

まず初めに、保育現場におけるキレル幼児の有無については、保育所では約6割、幼稚園では約3割の園がキレル幼児がいると回答しており、保育所は幼稚園に比べて2倍程度の園でキレル幼児が存在していることがわかる。同じ年齢層の幼児であってもかなりの差があることは興味深い。本報告の調査では、キレル幼児に対する質問の他に、最近の子どもたちのさまざまな変化について問う質問項目が含まれているが、例えば基本的な生活習慣の乱れや粗暴な言動と

いった否定的な変化について、幼稚園に比べて保育所の方がずっと多く指摘していることと同様な傾向である。これは、保育所における家庭の社会経済的背景の困難さに関連しているのではないかと考えられる。また、キレル幼児の出現率は保育所では約6%、幼稚園では約4%であり、安部ら（2002）の調査結果（約3%）に比べて幼稚園・保育所いずれも高かった。最近の子どもの変化について愛知県の保育所で調査した結果（2003）でも、心配な子どもの姿として、いわゆるキレルとされる行動を指摘する回答が相当数ある。全国の保育現場で、幼児期からすでにキレル子どもが一定以上存在していることは明らかであるといえる。

キレル幼児の性別としては、圧倒的に男児が多いとする園が多く、幼稚園・保育所の差はみられなかった。これは、前述の安部らの調査でも同様の結果であり、キレル子と保育者が捉えている幼児の性別には差があり、一般的に男児が多いと考えられているようである。また、キレル幼児は年齢が上がるほど多くみられるようになるが、これについても安部らの調査と同様の結果である。特に4歳児と5歳児では複数のキレル幼児を抱えている園がかなりの数にのぼっており、学級経営上の困難が予想される。

次に、キレル幼児の状態としては、感情の制御の困難と攻撃行動が多くみられた。これは、はじめに述べた宮下のキレルの定義に含まれる否定的感情の表出と攻撃行動という2つの側面と同様であり、保育現場で捉えられているキレル幼児の状態も、年齢の高い子どもを想定していると考えられる一般的な定義と共通していることがわかる。

キレル子どもの背景として、家庭での不適切な養育を指摘する園は幼稚園・保育所とも6割から7割以上とかなり多い。また、幼稚園では発達障害を指摘する園が4割程度みられ、その内訳としてはADHDが最も多かった。一般的にもキレル背景として、家庭の困難や子ども自身の特徴（特にADHD）が指摘されることが多い（例えば、花熊，2001）が、幼児でも同様の結果といえる。また、子ども自身の特徴として不適切な認知処理があげられることもあり、このような不適切さと、家庭での不適切な養育による攻撃のレディネスの高まりや誤った反応パターンの学習との関連が指摘されている。本報告では、幼児の認知的処理については回答を求めておらず、幼児における不適切な認知処理の実態はわからないが、家庭の養育によって幼児の認知的反応が影響を受けている可能性はあると考えられる。

一般に、感情の制御は、乳児期に養育者の助けをかりて行う二者間の制御に始まり、幼児期を経て自己制御が可能になるといわれている。幼児期は、他者や自己の感情を正しく認知し、感情を適切に制御する感情的有能さを発達させる重要な時期である（Saarni, 1999）。幼児期までにはほぼ全ての感情が出そろうが、幼児はその後、その様々な感情をうまく使うことを学ぶ必要があるのである。このような感情的有能さの発達には、特に養育者の役割が重要である。養育者は自分自身が適切な感情制御のモデルとなるとともに、子どもに適切な感情表現を教えなければならぬ（Denham, 1998）。このような役割は、家庭における親だけでなく、保育現場での保育者にも求められている。本調査では、保育者がキレル幼児やその養育者に適切に対処できていると回答した園は、子どもに対しては約半数、養育者に対しては約4割であ

り、半数近くの子どもや養育者に適切な対処がなされていない可能性が明らかになった。このように多くのキレる幼児が保育現場で認められるようになったのがいつ頃からなのかについては、データがないため断定はできないが、筆者らの周囲の保育者によれば、このような幼児が増えてきたという認識は最近になって増加しているようである。すなわち、保育現場では、増加してきたキレる幼児やその養育者に対する対処を現在模索しているところなのではないかと考えられる。キレの背景の一つとされるADHDの子どもは、適切な対処をされない場合、学童期に反抗挑戦性障害、思春期に行為障害へと問題を深めていくケースがあることが指摘されている（たとえば、原田，2002）。このような連鎖を防ぐためにも、保育現場での全てのキレる幼児に対して適切な対処がなされるよう、努力していかねばならないと考えている。

付記

この研究は文部科学省学術フロンティア推進事業の一部として実施された。なお、データの一部は日本発達心理学会第15回大会にて発表した。

引用文献

- 安部計彦，今村圭子，楠凡之（2002）. 保育園での「キレる子ども」の実態とその原因に関する一考察 質問紙調査をてがかりに. 北九州市立大学文学部紀要（人間関係学科）第9巻，1-20.
- Carolyn Saarni (1999). *The Development of Emotional Competence*. New York: Guilford Press.
- 花熊暁（2001）. 発達をつまづきと「キレる」 ADHD児の理解と支援，心理学ワールド，no.14.
- 原田謙（2002）. AD/H Dと反抗挑戦性障害・行為障害 精神科治療学，17，171-178.
- 宮下一博，大野久編著（2002）. シリーズ 荒れる青少年の心 キレる青少年の心 発達臨床心理学的考察. 北大路書房
- Susan A. Denham (1998). *Emotional Development in Young Children*. New York: Guilford Press.
- (財)愛知公園協会・愛知子どもの国（2003）. 平成14年度児童環境づくりに関する調査報告書 子どもの変化と保育・子育て支援.